

梁曉声の思い描く日本人像（2）

卞 惟行

The Japan image which Liang Xiaosheng imagines (2)

I ko Ben

Abstract

Last year there happened again quite a few problems related to China such as the disturbance in Tibet, poisoned dumplings with minced pork, the performances intended on purpose at the opening ceremony of Olympic games and so on.

Against the foreign mass media reporting such news as are undesirable to China, we have observed many reactions protesting that some of them were meant to put China into a difficult position whereas we were not responsible at all.

Liang Xiaosheng, as an author, stressed his loyalty for Chinese government stating that he would not care at all even if foreigners might consider Chinese people to be foolish, Referring to such issues as “Historical recognition”, “Buying trollops for money at Zhuhai” etc, Liang Xiaosheng criticizes Japan and makes unique criticism upon Japanese women.

Speeches and actions by the intellectuals will influence the public opinion but, at the same time, it is likely that as worldly tactics they are making their standpoint clarified just in case of political danger in future.

四川大地震後の報道

昨年の四川大地震は中国に大きな災害をもたらした。その状況は日本をはじめ外国でも詳細に報道され 1976 年の唐山大地震と比較し政府要人が、すぐに現場に駆けつけ、外国からの援助を迅速に受け入れた。その反面、オカラ工事¹という言葉は日本人も知るところとなり、地方政府が甘い汁を吸い、地震の後に物資が十分に行き渡らない、住むところのない人たちを強制的に立ち退かせたりして、行き場のなくなった人々は北京にある直訴村²に向かい、都合の悪い四川の役人は北京まで追いかけてきて連れ戻し、その光景は日本のいくつかのニュース、新聞でも報道された。

中国での地震後の報道として、中学校で学生の多くが被害に遭いながら、自らは一目散に逃げ出した教師、範跑跑（範美忠）³の行為と言動は、教師のモラルに関して大きな話題となった。

一方で多くの希少動物や家畜にも被害が及ぶ中、36日間地面の中に埋まりながら生き抜いた家畜の豚は“猪堅強”⁴と名づけられ、生き抜くことの象徴として崇められ、歌まで作られ、最近の

教養部

報道では「現在の金融危機においても我々は“猪堅強”になろう」という記事まであり、暗い話題の多い中、少しのユーモアと明るさを感じる話題である。当然これらは、官製のものではなく、人々の中から出てきた報道であり、中国の報道の変化を感じさせるものであるが、やはり“大本営発表”では、国家、政府、を称えるという旧然態とした報道も多い。5月22日付の日本における中国人向けの新聞「東方日報」では「胡、温感動了世界、各国媒体為中国加分」（胡锦涛、温家宝は世界を感動させ、各国メディアは中国にプラスを与えた。）という見出しである。確かに必死で救助にあたり、その中で命を落とした人もいる。懸命に救助活動をしてきた人たちは、称賛されるべきであるし、その救助活動を統括するのは中央政府であるが、政府が国民の生活、財産を守るのは当然のことであり、権力のあるトップ2の名前だけ出して「世界は称賛している」と誇示するのは、一党独裁ゆえに成せるものである。

報道以外に文学作品の中においても、かつては話の筋と関係なく「党のおかげで」「社会主義だけが」などの決まり文句が散りばめられていた。現在出版物も“商品”となり、それらのプロパガンダのような記述は少なくなったが、時には政府のスポークスマンが書いたのではと思える文章を見かける。

余秋雨と梁曉声の同様の価値観

その四川大地震で著名な作家、余秋雨⁹は自身のブログで子供を失った親による学校当局への講義や提訴について「含涙勸告請願災民」（涙を吞んで被害者に請願する）という文章で、「(海外の)反中メディアに利用される」「中国批判の口実が見つけれられない外国メディアが反中宣伝を始めた」「中国政府に批判的なメディアが『天災でなく人災』『裁判所が提訴を受理しない』などと『捏造報道』をしている」と批判、政府の救援、復旧の取り組みを支持した上で「(被害者は陳情など)横やりを入れるな」と勸告した。これに対しネットで50万件以上を超える書き込みがあり、「被害者による政府への請願は憲法が保障する権利の行使だ」「被害者の心情を分かっていない」など大部分が余秋雨への反論だ。

在米ジャーナリストの劉鑑敏氏は、余秋雨は20万元もの大金を寄付し「博愛の心はある」としながらも、「余秋雨の発想は中国知識人にみられる冷戦思考」と鎖国的な意識で世界を見て自分たちの責任を“敵”に押し付け公民の権利を犠牲にするなら、中国は永遠に進歩しない」と一刀両断に切り捨てている。

このような盲目的な愛国心は中国の知識人の中に多く見られ、梁曉声も「中国的兵是中国堪称一流的驕傲」（中国の兵を中国は一流の誇りと称えている）という文章の中で「何が私たち中国人の一流の誇りなのだろう？」と語りはじめ「五千年の文明史か？私たちの高山、大河それとも名称旧跡であろうか？（中略）百年ほど前からの科学技術の遅れは、弱った民族の自尊心から目線を五百年前、数千年前に向かわせ、祖先の知恵の中から慰めを得ていた。確かに私たちは立ち遅れて久しく、いまだに発展途上国であり、多くの国家の発展度をあらかずデータでも下位にある。」

「私たちには本当に現代において誇るものはないのだろうか？私たちが世界に大声で誇るに足

る、私たち中国の、世界一流のものがあるではないか！私は言いたい—中国人、卑屈になるな！私たちにはあるではないか、それは—私たちの兵、中国の兵、中国の人民子弟兵だ！」と熱く語り、更に「私たちは一種の敬愛の情から私たちの兵を見ている。もしかすると傲慢な外国の方々があざ笑ったり、皮肉ったりするかもしれない。しかし、なぜ私たちは彼らの蔑みにぶつぶつ言う必要があるのだろうか、私たちの兵、中国の兵は人民の安全のために後先を顧みず、前のものが倒れたら後のものが続き、勇往邁進する、犠牲の精神を持つ兵ではないか？」と述べている。彼が中国兵にどのような感情を抱こうが、それは彼の自由だが、“傲慢な外国の方々”というふうには外国人の“敵”を作り出し、「わたしたち中国人は」「私たちの兵は」などと言っているのは、劉鑑強氏が余秋雨に言う「冷戦思考」とまったく同じ発想である。

国家権力と人民の不満

中国人民解放軍は国内において「人民の子弟兵」と表現される。同じく国家権力である警察も「人民警察」と表現されるが、毛沢東の有名な一言、「政権は銃口から生まれる」の言葉通り、軍を掌握するものが天下を握るのである。現在も中央の権力の移行に際し軍をどれだけ掌握しているかが注目される。また現在“向銭看”⁶の風潮の中、軍関係者の中にはサイドビジネスに躍りになっているものもいるという。

去年中国で話題になった楊佳の事件は、07年秋に上海を訪れ、レンタル自転車に乗っていた楊佳が、警官に自転車泥棒と疑われた上に暴行を受け、自らの尊厳と、恨みを晴らすため08年7月に刃物を持って警察署を襲い、警官6人を殺害、3人を負傷させた。彼は同年11月26日に死刑が執行されたが、裁判所には多くの市民がつめかけ、楊佳の顔写真をプリントしたTシャツを着た支持者もおり、その中には都市開発事業で立ち退きを迫られた市民も多かったという。

「狗警察」⁷或いは警察の黒い制服から「黒狗」などの罵る声を私自身何度も聞いたことがある。

権力は腐敗するものであるが、建国60周年、改革開放30周年が過ぎ、国家権力の腐敗は今日も多くメディアが取り上げている。国民のフラストレーションも相当たまっており、以前の反日デモや去年のカルフルへの不買運動などは、近年豊かになり自信をつけた中国が本来あるべきポジションにと考える人もいるが、日々の生活に苦しんでいる層で、しかも政府には直接文句を言えない人たちが、自らの鬱屈晴らしをしている側面もあるのではないか。

「愛国」と「憂国」

鈴木邦男氏⁸は街宣車に乗り、反対意見の人に殴りこみに行った経験のある人だが、その著作「愛国者は信用できるか」（講談社現代新書）で三島由紀夫も「愛国」は嫌いだったと語り、「愛国」とは現行の政府によって作られた部分が多く、国に意見すること、改革すること＝国に反対することで、「憂国」は国のことを愛しているがゆえに国のことを憂い、国を改革しようとするものであり、三島由紀夫は「愛国」ではなく「憂国」だったと述べ、事実、三島は「憂国」というタイトルの小説を書いている。と述べている。

更に鈴木邦男氏は、愛国は一見平和的だが、暴発すれば国民全体を巻き込む。うむを言わせない。テロやクーデターは憂国から起きるが、局部的のものだし、瞬間的なものだ。愛国は〈戦争〉に突き進み、全国民を強制する。それも長い年月、強制する。

憂国は部分的で短期的だが、愛国は全体的で長期的だ。「憂国の士」はそれほどいない。しかし「愛国」は全員が強制される。「愛国心を持つのは当然だ」「国民の常識だ」と言われる。戦争の時は特に顕著だ。その全体の流れに対し消極的な人間は、「非国民!」「売国奴!」と言って袋叩きにされる。つまり、愛国心は、そうでない人間を排除し、罵倒するために使われることが多い。これは危険なことだ。「憂国」よりも「愛国」の方が何百倍も凶暴だし、残忍だ。と結論づける。

余秋雨、梁曉声は「愛国」に限りなく近い立場にあり、すべてにおいて「国」が正しいのである。一方、フランスに渡ったノーベル賞作家の高行健⁹、反体制作家といわれる劉曉波¹⁰などは、「国」(統治機構)には都合が悪いだろうが、「憂国」に近い立場の彼らは国を愛していないのだろうか?

盲目的な「愛国」は他国への「軽視」「蔑視」にもつながる一面を持っている。

梁曉声の日本女性観

梁曉声は95年に日本を訪問し、その見聞を「感覚日本」(日本を感じる)で述べている。その中で「日本的乳胶—女人」(日本の感光剤—女性)で日本女性に対する感想が語られている。彼は女性を、その都市の移動する芸術だとし、日本に来るまで「どの文化と媒体の影響を受けたのか日本女性の背は低く、足は太く短く、十人中四、五人は、まるで鮮族(朝鮮族?)の女性のように平たく丸い顔で、目鼻立ちははっきりせず、細い眉、細い目のものが多いと考えていた。しかしそれはまったく違って、彼女たちの身長は少しも低くなく、北京の女性と比べても決して低くなく、彼女らの足は短くもなく、太くもなく十日間でまったく0脚の人を見なかった。」彼は太った女性もまったく見なかったとし、その原因を「第一に半分以上の日本女性は結婚後、家において夫子供に尽くし、良妻賢母になる。半分以上の女性はやや太っているが、彼女らは出勤する必要はなく、自然とこの都市の風景から退いてしまったので、私は彼女らに会うことはなかった。第二に日本の食事は合理的である。あっさりしたものを好み、ほとんど脂っこいものを口にしない。第三に日本女性が仕事を見つけるのは容易ではない。あちこちに“男権主義”が見られるこの国では、男が女を採用するとき「容姿」は必ず、重要な部分となるはずである。(中略)半分の日本女性は都市の風景から消えるのだ。」「第四に幸運にも社会人になれた日本女性たちは、“地下鉄運動”をしている。それは、横断歩道であろうが、地下鉄の入り口であろうが、いつも早歩きで、このエアロビクスは自転車に乗るより効果的だ」としている。

更に梁曉声はホテルに滞在中、深夜のテレビ番組で、男性に言われるまま裸になる女性、性体験は300回以上と恥ずかしげもなく語る22歳の女性、ビキニ姿で男性に胸や身体を触られている女性を見て日本女性を「男性に調教され、性に対する羞恥心もない“二百五”“十三点”(“二百五”は間抜け、あほうの意味、“十三点”も同様の意味)とし、中国では歴史上、纏足など女子

を束縛する風習もあったが、太平天国に参加した勇敢な女性がいた。アメリカでは処女膜を護る運動があるそうだが、日本人の女性は、このように戦うことは絶対しないだろう、私はそう言い切れる。」「日本の男にはこのような女たちが必要で、日本の女にはこのような男たちが必要なのである。」と決め付けている。

梁曉声はオウム心理教の地下鉄サリン事件が発生したとき、実行犯の女性の一人が、かつて北京で会った日本の「貧しい家の女の子」の姿と重なり合ったという。しかし犯人の女性は23歳で無職、思想は過激で性格は偏屈という通訳の話聞き、「貧しい家の女の子」は、もう30を過ぎていだろうと安心した。更に持論を展開し、「指名手配犯の女性たちは、全員不細工で、彼女たちは、これまできっと日本の社会で疎外されてきた結果、社会に反し、社会に報復する心理的衝動の一つとなったのであろうか？あのとき私を訪ねてきた『貧しい家の女の子』の現在の運命はどんなのだろうか？暮らしはどんなのだろうか？」と述べているが、これだと日本の社会の中で不細工な人間（女性）は人として扱われず、排除されるかのようだ。

確かに日本の女性の社会進出には大きな問題があるだろう。しかし中国は、どんなのだろうか？完全に“資本主義”となった現在では、やはり人の採用、特に女性は「容姿」がものを言うことも多いのではないか？それは中国の雇用者（多くの場合、男性）が好色というより、利益を上げるために必要という面が多いだろう。

責任の「転嫁」

2003年9月の日本人が起こした珠海における集団買春事件は日本でも報道された。梁曉声は「珠海的見証—關於三百名日本人集体嫖娼事件的憤慨」（珠海の証明—日本人三百人の集団買春事件への憤慨）で9・18¹¹を前に中国人女性300人を蹂躪した日本人を「敏感な日まで後二日しかない、どの中国人も知っている9・18の前に、珠海に踏み込んできた日本の男たちは、そのことをまったく知らないわけではないだろう。（中略）日本人は組織的に計画したわけではないと、事件後言い訳をしているが、彼らの計画は周到で、“いただく”細かい手順まで白状している。これで組織的計画性はなかったというのだろうか。」と怒り、「この事件に関して、中国外交部¹²の係官は、これらの日本人の行為に対し、私たちは何も言うことはない」とコメントしている。どのような性質のものか、彼らははっきりしているし、我々中国人には、もっとはっきりしている。」と政府関係者の言葉も引用している。梁曉声は怒りの矛先を手招きした中国人にも向け、「外国人が中国にやってくると、彼らは金さえもらえばなんだってやる、彼らはどんな民族の尊厳を損なう恥ずかしいことだって手伝うのだ。このような同胞はどんどん多くなる、私は最大の嫌悪感を示さずにはいられない。彼らに対する嫌悪感は、珠海で集団買春をした日本人を超えている。」と憤る。しかし、彼は根本的なところで思い違いをしているようで、外国人がやってきて、中国人を買収しているという物言いだ、現在では中国人の方が、外国人の客を探している。そしてなぜこれだけの売春婦が多くいるのかということにまったく触れられていない。中国の貧富の差は現在連日のように報道されているが、一部の金持ちがこのような女性を求めているのは、容易に想

像がつく、そしてこれらの女性のほとんどは、四川省、河南省、湖北省などの貧しい農村から来ているのだ。地元でも、都会に出てきても仕事がなく、或いはだまされてこの道に入ってしまった女性もおり、そして彼女たちを送り出した一部の村では、彼女たちの稼ぎが大きな収入源になっているという。まさに改革開放政策の光と影の部分だが、彼は政府の失策や中国人の民族性から来る、「暗」の部分には触れていない。

昨年、海南師範大学で発生した盗撮事件は、ある男子学生が向かい側にある女子寮の女子学生の下着姿や着替える姿を盗撮、その写真300枚をネットカフェから流し、それを見て驚いた女子学生が警察に連絡、すぐに男子学生が捕まった。事件後の反応は、この男子学生を糾弾する声があるのは、もちろんだが、女子学生に対してもカーテンも閉めずに着替えたり、下着姿でうろろしたり、用心と羞恥心がないのでは、という声もある一方、心理学者の話として「符医師は記者に、日本ではAV女優は合法的な職業で、多くのAV女優は、よく学校の制服を着て撮影する。学校の制服は純潔を意味し、ある人にとっては性の暗示となる。したがって多くのネット上の住民は、このようなことに興味を持ち、あるものは自然と盗撮することを喜ぶようになる。」と個人のモラルに属する問題でありながら、まるで日本文化の影響を受けてこうなったと言わんばかりで、低俗な日本色情文化という、梁暁声同様の考えを示しており、中国人の日本に対する見方の一面をよくあらわしている。

注釈

- ¹ オカラは豆腐を作るときに出来る残りかす。材料費を搾取し、完成した建物はオカラのように脆い。
- ² 中国語では「上访村」。北京で役人の腐敗や不正などを告発するために、中国各地から集まった農民らが暮らす。
- ³ “跑”(pao) は中国語で「走る」以外に、「逃げる」、「逃走する」、「いなくなる」、の意味がある。
- ⁴ “猪”(zhu) は中国語で「豚」。“堅強”(jianqiang) は「堅固」、「強力」、「粘り強い」、「強靱」の意味。
- ⁵ (1946～) 中国の伝統文化にも造詣が深い。
- ⁶ かつての“向前看”(前に向かって進む) と同音で、現在の拝金主義を皮肉って、“向銭看”(金に向かって進む) と言う。
- ⁷ “狗”は犬、そして人を罵るときの言葉にも使われる＝犬畜生。

⁸（1943～）政治評論家、新右翼団体「一水会」最高顧問、予備校講師。

⁹（1940～）1990年に政治亡命、1997年フランス国籍取得、2000年10月12日に中国語作家としてはじめてのノーベル賞を受賞する。

¹⁰（1955～）現在も当局の監視下にある。

¹¹1931年9月18日、日中戦争の発端となった、満州事変が勃発した日。

¹²日本の外務省に相当。

引用文献

- 1、「亜州週刊」、コラム「新思維」 劉鑑強 2008年6月22日
- 2、「中国四川大地震学校倒壊で論争」（北京共同） 福井新聞 2008年6月25日
- 3、「愛国者は信用できるか」 鈴木邦男 講談社現代新書 2006年
- 4、「95随想録」 梁曉声 花城出版社 1996年
- 5、「人性似水」 梁曉声 湖南文芸出版社 2004年
- 6、「悪いのは女子学生？海南師範大学女子寮盗撮事件」 エクスプロア上海 2008年6月28日
- 7、「近百名女生宿舍内換衣遭偷拍300照片被上传」（100名近くの女子学生が寮で着替え中、盗撮に遭い、300枚の写真が流出する） 搜狐教育 2008年6月25日

参考文献

- ルポ中国「欲望大国」 富坂聡 小学館101新書 2008年
「今の中国」がわかる本 沈才彬 三笠書房 2007年

（平成21年3月31日受理）